

子どもの認知する親の養育態度と意欲との関連について

—養育態度を「受容」次元からとらえて—

姜 信善・山崎 悠希*

The Relation between Child's Motivation and Child's Cognition of The Parents' Attitude towards Bringing up The Child —Focus on "The Method of Acceptance"—

Sinsun KANG, Yuki YAMAZAKI*

キーワード：意欲，小学生，親子関係，受容，バウムリンド

keywords：Motivation, Primary School Children, Parent-Child Relationship, Acceptation, Baumrind, D.

問題と目的

意欲とは、「積極的に何かをしようと思う気持ち。あるいは、種々の動機の中から或る一つを選択してこれを目標とする能動的意思活動」(広辞苑, 1955)と定義される。学ぶ意欲, 働く意欲, 買う意欲, 遊ぶ意欲, 意欲と一口に言ってもその様態やそれが見られる場面は様々であり, どの場面でどのように意欲的になるかは個々において差があるが, それらを一括りにして「意欲」と呼ばれることが多い。

学校, 会社, 家庭, あらゆる場面で, 意欲を持って行動することは重要とされる。その理由として, 一つは, 能力の向上が挙げられる。学生であれば直接「学力」や「体力」など本人の能力として, 社会人であれば能力を高めることで生産性を向上させることもできる。また, その他に, 「充実感・満足感」の獲得も理由の一つである。角谷(2005)が中学生に行った総合学習への主体性と学校生活満足感との関連の研究では, 学業コンピテンスの高低に関わらず, 総合学習へ主体的に取り組む生徒は学校生活満足感が高くなることを報告している。また, Martin E. P. Seligman (1994) は自己の人生に意味を感じながら生活することが満足感につながるということを述べている。満足感とは生活の質(QOL)とも関連する重要な概念である。特に昨今では「もの」が飽和し何かを得ることで満足感を得にくくなったと言われることもあり, 個々がどのように生きる

か, 生活の質に重点が置かれるようになった。意欲的に行動することで, 満足感を高め, 個々の生活の質を高めることができるだろう。加えて, 「厭世自殺」という言葉があるように, しばしば「人生に意味を感じられないこと」が自殺の理由となることもある。意欲向上による満足感獲得は, そのような理由から起こる自殺の増加に少なからず歯止めをかけることができるのではと考えられる。

文部科学省は, 特に青少年期について, 「青少年期とは, 大人への準備期間として人格の基礎を築き, 将来の夢や希望を抱いて自己の可能性を伸展させる時期である。自己や社会の様々な物事に興味・関心を抱き, 知識・技能の獲得や課題の克服, 目標の達成等へ向かって意欲を持つことが, 成長のための行動の原動力となるのであり, 青少年期には特に, このような意欲を持って生き生きと充実した生活を送ることが重要である」と述べ, 青少年期の積極的かつ意欲的な活動が, 成長過程において重要な意味を持つことを示唆している。さらに, 学校教育における意欲向上の意義付けもなされている。橋本(2012)は, 児童が積極的に参加する授業を実践していくために, 「多様なニーズを持つ児童の学習意欲の喚起」が重要な課題の1つであると考えている。また, 山本(2008)は, 学習意欲を高めるための学級経営に関する報告の中で, 今日の教育現場で起こる問題と学習意欲との関連に触れ「学習意欲の低下は, 学力低下や学級崩壊等の今日的な教育課題とも無関係ではない」と考えている。以上のような見地から, 青少年期の意欲は自立に深く関連するとともに, 学

* 富山大学人間発達科学部発達教育学科
平成24年度卒業

校生活ではよりよい授業づくりや学級運営にも影響するものであると言えるだろう。

一方で昭和後期より、青年期の三無主義（無気力・無関心・無責任）というものが問題になった。2003年に行われた OECD の調査において、学習時間や学習内容への興味が国際平均値よりも低いという結果が出ていることや、フリーターやニートが社会的に増加していることから、文部科学省は、学習意欲・勤労意欲の低い青少年が増えつつあると考えている。そして、この「無気力」の傾向は児童期にも及んでいるとの指摘がある（深谷，1990）。笠井・村松・保坂・三浦（1995）は、子どもたちの無気力状態や無気力傾向は、「学業に対する選択的な無気力」ばかりでなく、友人関係や進路など生活全般に広がっていると考察している。船木・熊谷（2005）は、学校で起こるいじめや不登校などの諸問題の影には、少なからず無気力が関連しているのではないかと述べている。

児童期は人生の基礎を築く時期である。運動については、運動能力が飛躍的に向上するとともに、体力の基礎を作る時期とされる。また、人間関係について、Erikson（1950）は、友達と遊んだりすることで人間関係を学んでいく時期であるとしている。加えて、学習面においても児童期は重要であり、中学以降の基礎となる部分について学ぶ時期である。児童期を意欲的に過ごせるようにするということは、船木ら（2005）が述べるようないじめや不登校などの問題を予防するというだけでなく、授業や友人関係における経験や学びを意義深いものにするということにつながる。同じ環境で勉強をしたり運動をしたりして過ごした子どもたちでも、意欲的而非意欲的では、勉強や運動といった活動に意味を感じながら意欲的に生活する方が勉強や運動がよりいっそう大きな意味を持つものになるだろう。子どもたちが児童期を意欲的に過ごせるようにするために、児童期の意欲に関連する要因について検討していく必要があると考えられる。

児童期の意欲には様々な要因が関連していると考えられ、実際に多様な視点から研究がなされている。橋本・川越・谷山（2011）は、体育の授業への意欲に関連する要因について研究し、児童らの運動有能感が体育の授業への積極性に影響を与えていることを明らかにした。浅川（2008）の研究では、友人関係と登校意欲との関連を検討しており、友人に信頼

感を持っている場合欠席数が減じる傾向にあったと報告されている。栗原（2001）の観察研究では、自身の先行研究内で“学校での意欲の高低と、自己決定、自己肯定感、共感関係との密接な関連”が示唆されたとし、観察研究にてそれらの要因について具体的な検討を行った。その研究によると、“自分の行動が自分自身の選択により決定していると感じて、内発的意欲が高まる”こと、“自己価値観や存在感”が自己肯定感および自信につながり意欲に影響すると考えられることなどを報告している。これらの研究（橋本ら，2011；浅川，2008；栗原，2001）は、児童の内的要因と意欲との関連について検討したものであるが、その他の要因についての検討はあまりされていない。人間が「社会的」生き物であることを考えると、「対人関係」が意欲に与える影響について検討することが重要ではないだろうか。「学級の雰囲気認知」、「級友との関係」、「学習意欲」の3要因から構成され、“学校での集団生活ないし諸活動に対する帰属度、満足度、依存度などを要因とする児童生徒の個人的、主観的な心理状態”を指す『スクール・モラル』（倉智・松山，1967）の概念で意欲を捉え、学校場面における要因との関連を検討した河村（1999）の研究では、教師の指導行動・態度への認知と意欲との間に関連があることが報告されている。倉智ら（1967）の研究などから、児童の意欲には、家族・教師・友人など周囲の人々との関わり方が深く関連していることが推察される。そのため、意欲の要因について検討する場合、特に対人的要因について検討することが重要であると考えられる。

中でも幼児期から続いてきた継続的関わりにより、親子関係が子どもに及ぼす影響は、教師や友人関係による影響と比較してより大きいのではないかと推察される。

親の養育態度が児童に与える影響については、様々な研究がなされている。八越（2008）は、“これまでに、児童期における仲間からの受容には適切な社会的スキルと共感性が必要であること、そして、その社会的スキル、共感性の発達に母親の情緒的支持が関連していることが明らかになっている。すなわち、母親の情緒的支持が児童の社会的スキルや共感性を通して児童の学級適応に影響を与えられ、”とし、養育態度の「情緒的支持」の側面が学級適応に与える影響について検討している。そして、

“優しくて温かい受容的な母親の養育態度が、児童の社会的スキル獲得の程度を高めるとともに共感性を望ましく発達させること、そして、その社会的スキル及び共感性が児童の学級適応を高める”ことを明らかにし、また、“母親と自分の関係が情緒的に安定していると認知している児童は、母親に対する同一視を通して、良好な友だち関係を形成し維持していくための社会的スキルや共感性を身につけていく”のではないかと八越(2008)は考察している。戸ヶ崎(1999)は、“親子関係は、子どもが経験する最初の対人場面であり、初めて社会的スキルを学習する場面である”と述べている。加えて、菅原ら(2002)も、“児童期は、学校生活や友達集団の中で子どもの世界が飛躍的に広がり、社会的な発達が著しい時期である。この時期の子どもたちの家庭外での成長・発達を支えるのは、子どもが依って立つ家族関係であり、家族関係が健全に機能しているかどうかが精神的安定や学校適応などに大きく影響するものと考えられる”と述べている。一般的に児童期は、幼児期の家庭中心の人間関係から友人関係中心の人間関係に大きく移行する時期といわれるが、それでも家庭の影響力は依然として大きいと考えられる。これらの研究より、親の養育態度は子どもに大きな影響を与えることが推察される。

親の関わり方が子どもの意欲に与える影響に関する研究では、廣田(2004)は、子どもが「親はわたしのことをわかってくれている」と認知している場合無気力傾向が低くなることを報告している。無気力を極端に意欲のない状態として捉えると、廣田の研究は、家庭での「受容」的関わりが意欲と関連することを示唆していると考えられる。姜・酒井(2006)では、親からの「受容的」関わりが、児童の「授業場面での適応」や「規則・ルールへの適応」が関連していることが報告され、また、バウムリン(D Baumrind, 1967)は養育態度を「受容」と「統制」の2次元でとらえており、「統制」とともに「受容」的関わりの重要性が推察される。

しかしながら、養育態度の「受容」次元と児童期の意欲の関連についての研究は、廣田(2004)以外にあまり見当たらず、また、廣田(2004)の研究は、「親から理解されていると子どもが感じているか」という内容に焦点をあてたものである。しかし、「受容」のどのような側面が意欲に影響を及ぼすのかについては明らかにされていない。子どもがどの

ような状態の時に、親がどのような「受容」の仕方を行うことで子どもの意欲を高めることができるのかについて検討を行っていくことが重要であると考えられ、本研究では子どもの状態ごとに行われる「受容」の仕方に焦点を当てて、検討を行っていくことを目的とする。

養育態度を中心とした意欲に関する要因の検討を行う際、養育態度及び意欲については下記を考慮に入れ検討していくこととする。

まず、養育態度について、本研究では「実際に行われている親の養育態度」ではなく「子どもが認知している親の養育態度」をとりあげ、検討することとする。先述の武田(2010)の研究では、「親の期待に応えたい」と感じている子どもの意欲は親の期待によって上昇する一方で、「親の期待に応えたいとは思わない」子どもに対して親の期待は負の効果を持ち、かえって自己否定感を高めてしまうという傾向が観察されている。このことから、武田は「従来の研究では一方向的に扱われていた親の期待は、子どもの受け止め方によって与える効果が異なるということが検証された」としている。加えて、「親はわたしのことをわかってくれている」と認知している場合無気力傾向が低くなるという研究報告(廣田, 2004)や青年期において母親の養育を「指示・支配」的であったと認知している場合、無気力の「回避・消極」傾向に影響を及ぼすという研究結果(李, 2001)があることから、実際に養育がどう行われているかということよりも、子どもが親の養育をどのように認知しているかがより重要であるとされる。そのため、本研究でも「親の養育についての子どもの認知」を検討していくこととする。

次に、意欲について、本研究では以下のように捉えることとする。

高野(1988)は、意欲がない状態について、“興味関心がない”、“自信がない”、“目標がない”という3つを挙げている。“興味関心”、“自信”、“目標”は直接「意欲」を表すものではないが、これらがなくことで、「意欲がない」状態につながりやすいと考えられる。“勉強がしたい”“運動がしたい”という直接的に意欲を表す内容について検討することも重要であろうが、自信がなければ意欲がなくなるというように、「意欲がない」状態につながりやすい観点から意欲を検討することで、子どもが意欲をなくしてしまうことに事前に気づきやすくすることができ、

予防が可能になるのではないだろうか。そのため、本研究では“興味関心”，“自信”，“目標”の3つの観点を中心に意欲を検討していくこととする。また，それらが本当に「意欲」と呼べるものなのかを明らかにするために，“運動を積極的にしている”，“勉強を自ら行っている”というように実際の行動として表れる「意欲的行動」にも焦点を当て、「意欲」と「意欲的行動」との関連を明らかにしていく。子どもたちの内面の「意欲」と、行動として表れる「意欲的行動」両方について検討を行うことで、意欲をとらえやすくなり、教育現場などにおける指導のための提言が得られるだろう。

以上より、本研究では、「養育態度→意欲→意欲的行動」という連続した因果関係を全体的な仮説とし、児童が認知している『親』の養育態度及び、意欲、意欲的行動についての尺度作成を行い以下のような具体的仮説について検討を行う。

仮説 1. 子どもが親の養育態度を「受容」的だと認知することは、子どもの意欲に正の影響を与えるであろう。

仮説 2. 本研究で捉える意欲の各側面が、「意欲的行動」と密接に関連しているであろう。

I. 予備調査(研究1)

目的

本研究では、養育態度が意欲に及ぼす影響、意欲が意欲的行動に及ぼす影響について検討を行う。ここでは、それらの検討に用いる養育態度及び意欲、意欲的行動尺度を作成するため、意欲及び意欲的行動、子どもの認知する親の養育態度「受容」次元に関する項目を収集することを目的とする。

方法

(1) 親の養育態度「受容」次元について

【対象者】

小学校 4, 5, 6 年生の児童 255 名 (T 県の小学校 13 校, 男 113 名, 女 142 名)

【調査時期】

2012 年 1 月

【調査内容】

家庭で親から実際に子どもがしてもらっていること及び、してほしいと感じていることについて、自由記述での回答が求められた。より幅広い内容の養

育態度についての項目を収集するため、子どもが希望する養育についての質問項目が設けられた。「受容」次元に関する項目を収集するために、「受容」が行われると考えられる場面でポジティブな場面(子どもが成功した場面など)とネガティブな場面(子どもが悲しんでいる場面など)が設定された。具体的な内容は以下で述べる。

なお、子どものそれぞれの家庭の事情を配慮し、回答は「両親」ではなく「いつも自分の世話をしてくれる人(=養育者)」をはじめに想起させ、その人について答えてもらう形式となっており、項目中の「その方」は児童が想起した「いつも自分の世話をしてくれる人」を指す。これはこの後行う研究すべてで同様に行うものとする。

- ① 子どもが成功した・いいことがあったときの親の関わり方について
 - ・「テストでいい点がとれたとき、その方に、どうしてもらいたいですか？また、実さいは、どうしてもらっていますか？」
- ② 子どもが悪いことをしたときの親の関わり方について
 - ・「あなたが悪いことをしたとき、その方にどうしてもらいたいですか？また、実さいは、どうしてもらっていますか？」
- ③ 子どもが何かをがんばろうとしているときの親の関わり方について
 - ・「何かをがんばりたいとき、その方にはどうしてもらいたいですか？また、実さいは、どうしてもらっていますか？」
- ④ 子どもが悲しんでいるときの親の関わり方について
 - ・「悲しいとき、その方にはどうしてもらいたいですか？また、実さいは、どうしてもらっていますか？」
- ⑤ ①～④以外の場面の養育態度についての項目を収集するための設問
 - ・「その方があなたに言ってくれたり、してくれたりすることの中で、幸せだなと思うことがあったら教えてください。」
 - ・「その方に、『もっとこうしてほしいな』と思うところがあれば教えてください。」

(2) 意欲について

【対象者】

小学校教諭58名（T 県の小学校 7 校 男性19名
女性39名）

【調査時期】

2012年 1 月

【調査方法】

普段学校で実際に子どもと関わる中で、どのような子どもの行動や仕草を「やる気がない」と感じるか、自由記述での回答が求められた。子どもの学校生活は、「学業場面」、「対人場面」、「自主活動場面」の大きく 3 つで捉えることができると考えられるため、それぞれの場面ごとに「やる気がない」と感じる行動や仕草についての質問を行った。また、多様な場面からの検討を行うため、「学業場面」、「対人場面」、「自主活動場面」以外の場面についても回答が得られるように「そのほかの場面」に関する質問も設けた。具体的な項目については以下で述べる。

なお、「現在関わっている最中の子ども」について調べた場合、収集される項目の内容が限定されてしまう可能性があり、また、個人が特定されやすくなると考えられたため、「これまでの教員生活で接してきた子どもたち」についての回答が求められた。

- ① 学業場面(授業・宿題)における意欲について
 - ・「学業場面(授業・宿題)で、消極的、またやる気がないと感じる子どもの様子について教えてください」
- ② 対人場面における意欲について
 - 《友人との関わり方》
 - ・「友だちとかかわる場面で、消極的、またはやる気がないと感じる子どもの様子について教えてください」
 - 《教師との関わり方》
 - ・「先生とかかわりで、消極的、またはやる気がないと感じる子どもの様子について教えてください」
- ③ 自主活動場面での意欲について
 - ・「自主活動場面(委員会・クラブ活動)で、消極的、またはやる気がないと感じる子どもの様子について教えてください」
- ④ ①～③以外の場面の意欲についての項目を収集するための設問
 - ・「その他の やる気がないと感じる子どもの様子について、具体的に教えてください。」

結果および考察

予備調査の結果より、子どもの認知する親の養育態度「受容」次元及び意欲については、それぞれ次のように分類することができた。

(1) 子どもの認知する親の養育態度「受容」次元の測定項目の内容及びその作成

1. 測定項目内容について

養育態度の「受容」次元に関する項目については、5つのカテゴリーに分類することができた。

なお、本研究では受容を「子どもの気持ちを理解し、それに寄り添う。またはそのための行動」と定義している。

一つ目は、親と子が日常的に会話またはスキンシップを通して相互作用を行っているという《コミュニケーション》のカテゴリーである。具体的には、“話をすると聞いてくれる”、“楽しそうに話しかけてくれる”といった内容の項目が集められた。

二つ目は、テストでいい点をとったり、学校で楽しいことがあったりなど、子どもにポジティブな出来事があったとき、それを親も一緒に共有するという《共有》のカテゴリーである。具体的には、“うれしいことがあったときに一緒に喜んでくれる”、“テストでいい点をとったとき、「よかったね」と言ってくれる”といった内容の項目が集められた。

三つ目は、《なぐさめ・元気づけ》のカテゴリーである。このカテゴリーは上記に述べた《共有》がポジティブな経験への対応に関する内容であるのに対し、子どもが落ちこんだり悲しんだりといったネガティブな状態にあるときの親の受容的な対応に関する内容である。具体的には、“悲しい時になぐさめてくれる”、“何かに失敗してしまったときに励ましてくれる”という内容の項目が集められた。

四つ目は、子どもが良くないことをしても、子どもがきちんと反省すれば気持ちを切り替えて子どものしたことを許すことができるという《赦免》のカテゴリーである。このカテゴリーに分類される項目は、予備調査の「②子どもが悪いことをしたときの親の対応」で“悪いことをすると、とてもしつこく怒られる”、“反省してもしばらくは(親が)イライラしている”といった内容の回答があり、それらを「受容的」な項目として捉え

直し用いた。

五つ目は、親が子どもについてきちんと理解している、または子ども自身が親に理解してもらっている・理解しあえていると感じているという内容についての「相互理解」のカテゴリーである。具体的には、“(親が)私のことをわかってくれている”、“(一人にしてほしい時) そっとしておいてくれる”といった内容の項目が集められた。

2. 子どもの認知する親の養育態度「受容」次元の測定項目の作成・検討

予備調査で得られた上述の項目について再検討し、本研究の目的に合わせて測定項目の作成を行った。各項目について、被験者である小学生が回答しやすいように、表現を検討し、問題点がある場合には修正・削除された。最終的に、21項目が親の養育態度『受容』次元測定項目とされた。

(2) 意欲及び意欲的行動の測定項目の内容及びその作成

1. 測定項目内容について

まずは意欲について述べる。収集された回答内容を検討したところ、高野(1988)の内容に基づいた「目標」、「興味関心」、「自信」の3カテゴリーに「自律」のカテゴリーを加えた4カテゴリーに分類することができた。なお、問題と目的で述べたように、本研究では意欲を「積極的に何かをしようと思う気持ち。あるいは、種々の動機の中から或る一つを選択してこれを目標とする能動的意思活動」(広辞苑, 1955)と定義している。実際の予備調査では「意欲がない」状態について調べられているが、それらの内容を参考に「意欲がある」状態の項目が作成され、カテゴリーに分類された。

一つ目は、個人の生活、あるいは集団活動において目標・夢を持っているという「目標」のカテゴリーである。具体的には、“友だちと集団活動の目標を共有して一緒にがんばることができる”、“活動するときは目標を持って取り組む”、“将来の夢がある”など、短期・長期に関わらず目標に関する項目が集められた。

二つ目は、対人・対物的な興味関心に関する「興味関心」のカテゴリーである。具体的には、“いろんなことに興味関心を持っている”、“目を輝かせて熱中できるものがある”、“友だちとの交流を積極的に求める”といったように、興味の広さ・

興味の強さに関するカテゴリーである。

三つ目は、「自信」のカテゴリーである。このカテゴリーは、“自分に自信を持っている”、“自分にできるかわからないことでも思い切って挑戦してみる”といった、自信がある状態に基づいた行動、または自信そのものに関する項目が集められている。

四つ目は、自分で考えて自律的に行動することに関する「自律」のカテゴリーである。具体的には、“先生に言われなくても自分で考えて行動する”、“決められた仕事だけでなく、自分であることを見つけて活動できる”といった内容の項目が集められた。

次に、「意欲的行動」について、本研究では、意欲が実際の行動として現れたものとし、子どもの意欲が行動として表れやすい場面として、「勉強場面」、「運動場面」、「友人関係場面」の3つを想定した。そして、そこで示されると思われる子どもの行動が項目として考えられた。

一つ目は、知識を積極的に取り入れようとし、授業に積極的に参加しているという「知識探究」のカテゴリーである。具体的には、“授業中は、積極的に手をあげるようにしている”、“自分の好きな教科以外でも積極的に取り組む”などの項目が集められた。

二つ目は、運動を積極的に行い、運動能力を向上させようと努力するという「運動能力向上」のカテゴリーである。具体的には、“なわとびなどで、できる技を積極的に増やそうとしている”、“体育で苦手なことを克服しようと練習している”などの内容が集められた。

三つ目は、「交友活動」のカテゴリーである。このカテゴリーは、“自分に自信を持っている”、“自分にできるかわからないことでも思い切って挑戦してみる”といった、積極的に友だちと関わり、交友関係を広げていくといった内容となっている。

四つ目は、自分で考えて自律的に行動することに関する「自律」のカテゴリーである。具体的には、“先生に言われなくても自分で考えて行動できる”、“決められた仕事だけでなく、自分であることを見つけて活動できる”といった内容の項目が集められた。

2. 意欲及び意欲的行動の測定項目の作成・検討

予備調査を参考に作成された項目についてさらに検討を重ね、本研究の目的に合わせて測定項目の作成を行った。各項目について、被験者である小学生が回答しやすいように、表現を検討し、問題点がある場合には修正・削除された。最終的に、『自律』が6項目、『目標』が6項目、『自信』が5項目、『興味関心』が11項目とされ、すべてを合わせて「意欲」に関する項目とされた。また、『知識探究』が5項目、『運動能力向上』が3項目、『交友活動』が2項目とされ、すべてを合わせて「意欲的行動」に関する項目とされた。

II. 子どもの認知する親の養育態度及び意欲、意欲的行動に関する尺度の作成(研究2)

目的

予備調査で収集した項目内容に基づき、子どもが認知する親の養育態度の「受容」次元及び、意欲、意欲的行動に関する尺度作成を行うことを目的とする。

方法

(1) 子どもの認知する親の養育態度養育態度「受容」次元について

【対象】

小学校4,5,6年生の児童488名(T県と他1都道府県内の小学校4校 男258名,女228名,不明2名)

【調査時期】

2012年11月~12月

【調査内容・分析手続】

予備調査によって収集された子どもの認知する親の養育態度の『受容』次元に関する、すべての質問項目について、「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらとも言えない」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」の5件法により回答が求められた。

回答を「あてはまる」を5点、「どちらかというにあてはまる」を4点、「どちらとも言えない」を3点、「どちらかというにあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点とし、因子分析を行った。

(2) 意欲及び意欲的行動について

【対象】

小学校4,5,6年生の児童1253名(T県と他1都道府県内の小学校13校 男647名,女604名,不明2名)

【調査時期】

2012年11月~12月

【調査内容・分析手続】

予備調査によって収集された子どもの認知する意欲及び意欲的行動に関する、すべての質問項目について、「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらとも言えない」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」の5件法により回答が求められた。回答を「あてはまる」を5点、「どちらかというにあてはまる」を4点、「どちらとも言えない」を3点、「どちらかというにあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点とし、因子分析を行った。

結果および考察

(1) 子どもの認知する親の養育態度「受容」次元尺度

予備調査の結果に基づいて作成された子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元に関する質問項目の回答について、プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減退状況などから、2因子を仮定することができた。プロマックス回転後の因子パターンはTable 1に示す。

第1因子は、“何か成功したとき、その人はいっしょに喜んでくれる”や“あなたにうれしいことがあったら、その人はいっしょによろこんでくれる”といった子どもがポジティブな状態にあるときの受容の仕方に関する項目と、“その人とよく話をする”、“その人は、あなたが学校であった話をすると、聞いてくれる”といった子どもの普段の働きかけに対する受容の仕方に関する項目が含まれた。ポジティブな状態にある時と普段の受容の仕方に関する因子であるため「ポジティブ時受容」と名付けられた。

第2因子は、“あなたが落ち込んでいるとき、その人はなぐさめてくれる”、“あなたが悪いことをしたとしても、その人は変わらず自分のことを好きでいてくれる”などの項目で構成され、子どもが良くないことをしたり、失敗したりといったネガティブな状態にあるときの受容に関する内容となっていた。そこで第2因子は「ネガティブ時受容」と名付けられた。

因子を仮定した後に、 α 係数を算出したところ、因子ごとの α 係数は、第1因子、第2因子のそれぞれにおいて順に、0.81, 0.82であった。

Table 1 親の養育態度の「受容」次元に関する項目の因子分析結果（プロマックス回転後）

No	項 目 内 容	F1	F2	共通性
F1 「ポジティブ時受容」				
11	何か成功したとき、その人はいっしょに喜んでくれる	.880	-.020	.748
3	あなたにうれしいことがあったら、その人はいっしょによるこんでくれる	.798	.018	.659
10	その人とよく話をする	.517	.033	.295
15	テストでいい点をとったとき、その人は「よかったね」と言ってくれる	.433	.198	.359
21	その人は、あなたが学校であった話をする、聞いてくれる	.427	.213	.368
F2 「ネガティブ時受容」				
17	あなたが落ち込んでいるとき、その人はなぐさめてくれる	-.014	.804	.629
13	あなたが何かに失敗したとき、その人ははげましてくれる	.257	.641	.731
16	その人は、あなたが悪いことをしても反省すればちゃんと許してくれる	.074	.590	.422
12	お説教が終われば、その人はいつも通りせってくれる	.016	.565	.333
20	あなたが悪いことをしたとしても、その人は変わらず自分のことを好きでいてくれる	.060	.559	.368
因子間相関		F1	—	
		F2	.773	—
(α係数)			0.81	0.82

Table 2 意欲に関する項目の因子分析結果（バリマックス回転後）

No	項 目 内 容	F1	F2	F3	F4	共通性
F1 「自律」						
2	先生が見ていなくても、きちんと活動することができる	.677	.151	.000	.046	.484
12	クラスで何かをするとき、先生に言われなくても活動をすすめることができる	.663	.078	.038	.178	.479
7	クラスのみんなと活動するとき、自分の役割を見つけて積極的に行動する	.542	.144	.086	.243	.381
1	何か活動する際は、目標を持って取り組んでいる	.534	.060	.241	.131	.364
22	教室や学校の中をすすんで整えるようにしている	.458	.070	.162	.088	.249
17	話し合いでは、自分の意見を持って参加するようにしている	.421	.061	.176	.252	.275
27	先生から言われた宿題以外にも、自分で勉強している	.351	.140	.170	.049	.174
F2 「興味関心のなさ」						
18	面倒だと思ふことが多い	.209	.501	.045	.002	.296
9	みんなと活動や作業をしていても、つまらなくなつて一人だけ遊んでしまう	.103	.499	.044	.019	.262
14	それほど仲の良い友達から遊びに誘われても、気がのらないことが多い	.060	.482	.036	.033	.239
23	授業の内容に興味を持てないことがある	.136	.468	-.012	.010	.238
3	友達に「遊ぼう」と言われても、興味のない遊びだったら行かなくてもいいと思う	-.049	.449	.066	.036	.210
F3 「目標」						
26	今、何かがんばりたいことや目標がある	.220	.107	.795	.221	.740
16	将来「これになりたい」と強く思えるものがある	.138	.041	.398	.127	.195
F4 「能力感」						
25	自分には出来ることがたくさんあると思う	.276	.069	.293	.694	.649
20	自分にしかできないことがあると思う	.226	.009	.147	.561	.388
		2.261	1.252	1.059	1.049	(35.13)
		14.132	7.824	6.619	6.556	
(α係数)		0.76	0.61	0.55	0.66	

(2) 意欲尺度

予備調査の結果に基づいて作成された意欲に関する質問項目の回答について、バリマックス回転による因子分析を行ったところ、固有値の減退状況などから、4 因子を仮定することができた。バリマックス回転後の因子パターンは Table 2 に示す。累積寄与率は35.1%であった。

第1 因子は“先生が見ていなくても、きちんと活動することができる”, “先生から言われた宿題以外にも、自分で勉強している”, “教室や学校の中をすすんで整えるようにしている”などの項目によって構成されており、自分で考えて自律的に行動しているといった内容となっている。そのため、第1 因子は、「自律」と名付けられた。

第2 因子は、“みんなで活動や作業をしても、つまらなくなっていて一人だけ遊んでしまう”, “授業の内容に興味を持たないことがある”などの項目によって構成されており、興味関心を感じる対象が人より狭く、また興味関心のなく面倒、嫌だと感じる人が多いという内容となっている。そのため、第2 因子は、「興味関心のなさ」と名付けられた。

第3 因子は、“今、何かがんばりたいことや目標がある”, “将来「これになりたい」と強く思えるものがある”という2 項目によって構成されており、現在、または将来的に達成したいことがあ

るという内容となっている。そのため、第3 因子は、「目標」と名付けられた。

第4 因子は、“自分には出来ることがたくさんあると思う”“自分にしかできないことがあると思う”という2 項目で構成されており、自分の能力に対して自信を持っているという内容となっている。そのため、第4 因子は、「能力感」と名付けられた。

因子を仮定した後に α 係数を算出したところ、因子ごとの α 係数は、第1 因子、第2 因子、第3 因子、第4 因子のそれぞれにおいて順に、0.76, 0.61, 0.55, 0.66であった。

(3) 意欲的行動尺度

予備調査の結果に基づいて作成された意欲的行動に関する質問項目の回答について、プロマックス回転による因子分析を行ったところ、固有値の減退状況などから、3 因子を仮定することができた。プロマックス回転後の因子パターンは Table 3 に示す。

第1 因子は“わからないことは積極的に調べるようにしている”, “自分の好きな教科にも積極的に取り組む”などの項目によって構成されており、積極的に知識の探求を行い、授業にも意欲的に参加しているといった内容となっている。そのため、第1 因子は、「知識探究」と名付けられた。

第2 因子は、“なわとびやマット運動では、で

Table 3 意欲的行動に関する項目の因子分析結果 (プロマックス回転後)

No	項 目 内 容	F1	F2	F3	共通性
F1 「知識の探求」					
36	わからないことは積極的に調べるようにしている	.800	-.101	-.016	.543
35	自分の好きな教科以外でも積極的に取り組む	.749	.035	-.049	.552
38	いろんなことを知りたいと思う	.409	.085	.179	.346
33	授業中は、積極的に手をあげるようにしている	.406	.139	.029	.269
F2 「運動能力向上」					
29	なわとびやマット運動では、できる技をたくさん増やそうとしている	-.069	.855	-.007	.661
34	体育で、できないことがあったら、できるまで練習する	.120	.573	.012	.434
F3 「交友活動」					
37	私は、いつもいろんな友だちと遊んでいる	-.025	-.050	.844	.645
32	他の学年や他のクラスの子とも、遊んだりしている	.054	.147	.374	.259
因子間相関		F1	—		
		F2	.585	—	
		F3	.563	.571	—
(α 係数)			.715	.683	.550

きる技をたくさん増やそうとしている”，“体育で、できないことがあったら、できるまで練習する”という2項目によって構成されており、運動や体育の授業に積極的に取り組んで運動能力を向上させるという内容となっている。そのため、第2因子は、「運動能力向上」と名付けられた。

第3因子は，“私は、いつもいろんな友だちと遊んでいる”，“他の学年や他のクラスの子とも、遊んだりしている”という2項目によって構成されており、友だちと積極的に関わるという内容となっている。そのため、第3因子は、「交友活動」と名付けられた。

因子を仮定した後に α 係数を算出したところ、因子ごとの α 係数は、第1因子、第2因子、第3因子のそれぞれにおいて順に、0.72, 0.68, 0.55であった。

Ⅲ. 子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元と意欲との関連について（研究3）

1. 子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元が意欲に及ぼす影響について

目的

廣田（2004）は、子どもが父親、母親のそれぞれに対して「自分の気持ちを分かってくれる」と認知することが無気力に負の影響を及ぼしていることを報告し、子どもが自分の親から理解されていると思うこと、つまり親からの受容感は子どもの心の健康に深く関連していることを示唆している。このことから、親からの受容感は子どもに安心感を持たせ、それが意欲につながりやすくすることが予想される。そこで、研究2で示された子どもの認知する親の養育態度の受容次元尺度の「ネガティブ時受容」、「ポジティブ時受容」が子どもの意欲にどのように関連しているかについて明らかにすることをここの目的とする。

方法

【対象者】

小学校4,5,6年生の児童488名（T県と他1都道府県内の小学校4校 男258名, 女228名, 不明2名）

【調査時期】

2012年11月～12月

【調査内容】

子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元及び意欲に関する、すべての質問項目について「あて

はまる」「どちらかというあてはまる」「どちらとも言えない」「どちらかというあてはまらない」「あてはまらない」の5件法により回答が求められた。なお、測定尺度には、研究2で作成された子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元尺度及び意欲尺度が用いられた。

結果

【1】子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元と意欲との関係について

まず、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元が意欲とどのように関連しているのか検討するために、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元尺度の各因子項目合計得点と意欲尺度の各因子項目合計得点との相関関係が求められた。結果は、Table 4に示す。

Table 4 子どもが認知する親の養育態度の「受容」次元尺度の各因子項目合計得点と意欲尺度の各因子項目合計得点との相関関係

		受容	
		ポジティブ時受容	ネガティブ時受容
意欲	自律	.344***	.360***
	興味関心のなさ	-.195***	-.225***
	目標	.297***	.252***
	能力感	.318***	.338***

*** $p < .001$

「意欲」尺度のすべての因子と「受容」次元尺度のすべての因子の間において、有意な正の相関関係がみられた（いずれにおいても $p < .001$ ）。ただし、意欲第2因子「興味関心のなさ」においてのみと、受容各2因子「ポジティブ時受容」及び「ネガティブ時受容」との間に負の相関関係が見られた。

【2】子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元が意欲に及ぼす影響について

相関関係についての結果から、より具体的に子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元が意欲に及ぼす影響について検討するために、意欲の各因子項目合計得点を基準変数とし、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元の各因子項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は、Table 5に示す。また、以下にて、それぞれの基準変数ごとにその結果について詳しく述べる。

a. 意欲第1因子「自律」に及ぼす子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元の影響について
子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元

Table 5 『子どもが認知する親の養育態度の「受容」次元→意欲』の重回帰分析の結果

	自律	興味関心のなさ	目標	能力感
ポジティブ時受容	.196**	-.079	.250***	.163**
ネガティブ時受容	.222***	-.171**	.079	.230***
重相関係数(調整済み R ²)	.144***	.050***	.093***	.128***

***p<.001, **p<.01

(注) 数値は標準偏回帰係数(β)を表す。

第1因子「ポジティブ時受容」の偏回帰係数は、(β)=.196(t(436)=3.173**, p<.01, 両側検定)であった。子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元第2因子「ネガティブ時受容」の偏回帰係数は、(β)=.222(t(436)=3.597***, p<.001, 両側検定)であった。したがって、意欲第1因子「自律」に及ぼす影響は、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元第1因子、第2因子のいずれにおいても有意であった。なお、この時の回帰式全体の説明率は、R²=.144(F(2, 436)=37.860***, p<.001, 両側検定)であり有意であった。

b. 意欲第2因子「興味関心のなさ」に及ぼす子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元の影響について

意欲第2因子「興味関心のなさ」に及ぼす影響は、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元第2因子「ネガティブ時受容」においてのみ有意であり、偏回帰係数は、(β)=-.171(t(447)=-2.674**, p<.01, 両側検定)であった。なお、この時の回帰式全体の説明率は、R²=.050(F(2, 447)=12.848***, p<.001, 両側検定)であり有意であった。

c. 意欲第3因子「目標」に及ぼす子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元の影響について

意欲第3因子「目標」に及ぼす影響は、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元第1因子「ポジティブ時受容」においてのみ有意であり、偏回帰係数は、(β)=.250(t(456)=4.027***, p<.001, 両側検定)であった。なお、この時の回帰式全体の説明率は、R²=.093(F(2, 456)=24.362***, p<.001, 両側検定)であり有意であった。

d. 意欲第4因子「能力感」に及ぼす子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元の影響について

意欲第4因子「能力感」に及ぼす影響は、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元第1因

子、第2因子のいずれにおいても有意であった。

「受容」次元第1因子「ポジティブ時受容」の偏回帰係数は、(β)=.163(t(453)=2.677*, p<.01, 両側検定), 「受容」次元第2因子「ネガティブ時受容」の偏回帰係数は、(β)=.230(t(453)=3.766***, p<.001, 両側検定)であった。なお、この時の回帰式全体の説明率は、R²=.128(F(2, 453)=34.345***, p<.001, 両側検定)であり有意であった。

考察

子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元第1因子「ポジティブ時受容」は、意欲第1因子「自律」及び第3因子「目標」、第4因子「能力感」に正の影響を与えることが示された。しかしながら、意欲第2因子に対しての影響力は有意ではなかった。

このことから、日常的にコミュニケーションを多くとり、子どもの楽しい気持ちやうれしい気持ちと一緒に共有することが意欲に対しては正の影響を与えと言える。具体的には、“その人は、あなたが学校であった話をする、聞いてくれる”という項目のように自分の話を親に聞いてもらうことから、「自分は親に大切にされている」という自己肯定感が育ち、自分の行動や考えに自信を持てるようになる。それが、自分から進んで行動する自律性と結びつくのではないかと考えられる。また、“テストでいい点をとったとき、その人は「よかったね」と言ってくれる”という項目のようなほめられ体験によって、「自分はできる」という「能力感」を高めることができるのではないかと考えられる。もしくは、単純に、ポジティブな感情を親と共有することによって、子どもの中でその感情が持続しやすくなり、気持ちが明るくなって未来に対しても前向きに考えることができるようになるのではないだろうか。

子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元第2因子「ネガティブ時受容」は、意欲第1因子「自律」および第4因子「能力感」に正の影響を与え、また、意欲第2因子「興味関心のなさ」に負の影

響を与えることが示された。一方で、意欲第3因子「目標」に対しての影響力は有意ではなかった。結果から、子どもが落ち込んだり悲しんだりしているときに、親がなぐさめたりはげましたりすることで、子どもが「親はいつも自分の味方でいてくれる」「親は自分のことをわかってくれている」と感じることができ、それが能力感を含めた「自己への自信」につながるのではと考えられる。また、「自分がどのような状態になっても親が常に支えてくれる」という確信から、失敗や恥をあまり恐れずに様々なことに自分から積極的に取り組む姿勢が育つのではないだろうか。

全体的に見てみると、「目標」は「ポジティブ時受容」から、「興味関心のなさ」は「ネガティブ時受容」から影響を受けている。このことから、子どもが目標を持ってものごとに取り組めるようになるためには、親が子どもの成功をほめる、または普段からコミュニケーションをとることにより子どもが考えていることや思っていることを聞くことが必要であるのに対し、子どもが様々なことに興味関心を持てるようになるためには、子どもが悲しんでいる時になぐさめたり励ましたりすることで、「親が自分の味方でいてくれる」と子どもが認識することが必要であり、それにより失敗や恥を恐れて興味関心が制限されてしまうことが少なくなると考えられる。

以上より、仮説1を支持する結果が得られ、養育態度の「受容」次元は意欲に正の影響を与えることが明らかとなった。

2. 子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元と意欲の関連についての検討

目的

本研究では受容を『子どもがネガティブな状態にあるときの受容』と『子どもがポジティブな状態にあるときの受容、および普段の働きかけに対する受容』の2つに分類して検討を行っている。子どもが落ちこんでいたり悲しんでいたりといったネガティブな状態にあるときに慰めたり励ましたりする受容の仕方と、子どもの努力がよい結果につながったと

きや学校で楽しいことがあったときの受容の仕方はどちらも重要であると考えられる。子どもがポジティブな状態にあるとき、もしくはネガティブな状態にあるとき、どちらか一方において十分に受容されていたとしても、もう一方において受容されていると感じることができなければ、それは望ましい受容とは言えないだろう。そこで、子どもの状態「ネガティブ」、「ポジティブ」2通りの場合の受容の程度によって群分けを行い、意欲にどのように関連しているのかを検討することを目的とする。そのため、具体的には、「ネガティブ」、「ポジティブ」両方において受容の得点が高い群は、「ネガティブ」、「ポジティブ」どちらか一方のみ得点が高い群や両方において得点が低い群よりも意欲が高いのではないかと考えられ、それについて検討していく。

方法

【対象者・調査時期・調査内容】

研究3-1と同様

【分析手続】

より具体的に、子どもの認知する親の養育態度の「受容」と意欲がどのように関連しているのかを調べるため、子どもの認知する親の養育態度の「受容」の程度による意欲の差を検討することとした。

まず、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元尺度の各因子ごとに項目得点の平均が求められ、各因子の項目得点が平均未満と平均以上の2群にそれぞれ分けられた。それらの組み合わせによって、以下のような4群に分類された。

- ・【受容高群】：「ポジティブ時の受容」「ネガティブ時の受容」いずれも得点が平均以上の群
- ・【ポジティブ時受容低群】：「ポジティブ時の受容」のみ得点が平均以上の群
- ・【ネガティブ時受容高群】：「ネガティブ時の受容」のみ得点が平均以上の群
- ・【受容低群】：「ネガティブ時の受容」「ポジティブ時の受容」いずれも得点が平均未満の群

子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元の群分けの結果は、Table 6-1に示す。

Table 6-1 子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元の群分け基準値と「受容」次元群

		ネガティブ時受容 (平均：20.24)	
		20.24未満	20.24以上
ポジティブ時受容 (平均：22.01)	基準値	20.24未満	20.24以上
	22.01未満	受容低群	ネガティブ時受容高群
	22.01以上	ポジティブ時受容高群	受容高群

以上で述べたように群分けを行った後、子どもの認知する親の養育態度「受容」群(4)、性別(2)を独立変数とし、意欲尺度を従属変数とする分散分析を行う。分散分析の結果が有意である場合は、下位

検定として、Scheffe 法による多重比較を行う。

結果

分散分析の結果は、Table 6-2 に示す。

意欲第 1 因子「自律」においては、子どもの認

Table 6-2 子供の認知する親の養育態度の「受容」次元群による意欲各項目合計得点の平均と SD および分散分析の結果

		性	M(SD)	N	主効果	交互作用	下位検定
自 律	全体		24.70(4.97)	438	F(3, 430) = 18.683***	n.s	受容低群<ネガティブ時受容高群, 受容高群, ポジティブ時受容高群<受容高群
	受容低群	男	22.12(5.09)	90			
		女	22.67(4.72)	51			
		計	22.32(4.95)	141			
	ネガティブ時受容高群	男	25.38(4.16)	24			
		女	25.14(5.23)	14			
		計	25.29(4.51)	38			
	ポジティブ時受容高群	男	24.09(5.37)	23			
		女	24.40(3.49)	25			
		計	24.25(4.44)	48			
受容高群	男	26.17(4.85)	92				
	女	26.39(4.32)	119				
	計	26.29(4.55)	211				
興味関心	全体		13.31(4.12)	449	F(3, 441) = 5.715**	n.s	受容高群<受容低群
	受容低群	男	14.49(3.50)	94			
		女	14.46(4.05)	52			
		計	14.48(3.69)	146			
	ネガティブ時受容高群	男	12.87(3.70)	23			
		女	12.36(3.15)	14			
		計	12.68(3.47)	37			
	ポジティブ時受容高群	男	13.58(3.53)	24			
		女	13.15(4.03)	26			
		計	13.36(3.76)	50			
受容高群	男	13.27(4.60)	94				
	女	12.11(4.22)	122				
	計	12.62(4.41)	216				
目 標	全体		8.41(1.96)	458	F(3, 450) = 12.047***	n.s	受容低群<受容高群
	受容低群	男	7.57(2.23)	96			
		女	7.81(2.09)	53			
		計	7.66(2.17)	149			
	ネガティブ時受容高群	男	8.57(1.83)	23			
		女	8.21(2.08)	14			
		計	8.43(1.91)	37			
	ポジティブ時受容高群	男	8.21(2.27)	24			
		女	8.81(1.63)	26			
		計	8.52(1.96)	50			
受容高群	男	9.21(1.36)	98				
	女	8.63(1.80)	124				
	計	8.89(1.64)	222				
能 力 感	全体		7.18(2.27)	455	F(3, 447) = 16.704***	n.s	受容低群<ポジティブ時受容高群, 受容高群
	受容低群	男	6.21(2.24)	94			
		女	5.92(2.27)	53			
		計	6.11(2.25)	147			
	ネガティブ時受容高群	男	7.33(2.35)	24			
		女	6.93(2.34)	14			
		計	7.18(2.32)	38			
	ポジティブ時受容高群	男	8.00(1.67)	24			
		女	7.31(1.93)	26			
		計	7.64(1.83)	50			
受容高群	男	8.13(1.96)	97				
	女	7.51(2.21)	123				
	計	7.79(2.12)	220				

***p<.001, **p<.01

知する親の養育態度の「受容」次元群の主効果 ($F(3, 430)=18.683^{***}$, $p<.001$) が見られ、【受容低群】より【ネガティブ時受容高群】と【受容高群】の方が得点が高く、また、【ポジティブ時受容高群】よりも【受容高群】の方が得点が高いことが示された。

意欲第2因子「興味関心のなさ」においては、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元群の主効果 ($F(3, 441)=5.715^{**}$, $p<.01$) が見られ、【受容高群】より【受容低群】の方が得点が高いことが示された。

意欲第3因子「目標」においては、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元群の主効果 ($F(3, 450)=12.047^{***}$, $p<.001$) が見られ、【受容低群】より【受容高群】の方が得点が高いことが示された。また、有意傾向ではあったが、【受容低群】よりも【ポジティブ時受容高群】の方が得点が高かった。

意欲第4因子「能力感」においては、子どもの認知する親の養育態度の「受容」次元群の主効果 ($F(3, 447)=16.704^{***}$, $p<.001$) が見られ、【受容低群】より【ポジティブ時受容高群】【受容高群】の方が得点が高いことが示された。また、有意傾向ではあったが、【受容低群】よりも【ネガティブ時受容高群】の方が得点が高かった。

なお、意欲のすべての因子において、性別の主効果は示されなかった。

考察

「興味関心のなさ」を除く意欲のすべての因子「自律」「目標」「能力感」で、【受容低群】よりも【受容高群】の方が得点が高いという結果が見られた。また、「興味関心のなさ」に関しては、【受容高群】よりも【受容低群】の方が得点が高いという結果が見られた。このことから、子どもが親の養育態度を受容的だと認知し、「自分は親に大切にされている」と感じることで、自己肯定感が高まり、「自己への自信」に基づいた自発的な行動をとることができるようになることが推察される。しかしながら、親からの受容による子どもの意欲の差について見ると、【ネガティブ時受容群】及び【ポジティブ時受容群】と【受容高群】の間にはあまり有意な差は示されなかった。このことから、もちろん「ポジティブ時」、「ネガティブ時」の場合を問わず親から「受容」されることが重要であることは言うまでもない

が、「ポジティブ時」、「ネガティブ時」どちらか一方でも子どもから「受容」が認知されることにより、子どもが意欲を持ちやすくなることが示唆された。

意欲第1因子「自律」においてのみ、【ポジティブ時受容群】と【受容高群】の間に有意な差が示され、【ポジティブ時受容群】よりも【受容高群】の方が得点が高かった。このことから、「ポジティブ時」だけでなく「ネガティブ時」において「受容」を行うことで、「親は、私がどんな状態でもいつも味方だ」という安心感を抱き、それが失敗や恥を恐れずに自分から行動する姿勢が育つのではないかと考えられる。「自律」において、【受容低群】より【ネガティブ時受容群】の方が得点が高いという結果からも、「自律」には「ネガティブ時」においての「受容」が特に重要だと言えるだろう。

そして、意欲第4因子「能力感」においては、【受容低群】よりも【ポジティブ時受容群】の方が得点が高かった。このことから、上記で述べたように「自律」では「ネガティブ時」の「受容」が特に重要だと考えられたが、「能力感」にとっては「ポジティブ時」の「受容」が特に重要であることが推察される。これは、子どもが成功したときにほめたりすることで、子どもが「できる」という自信を持ちやすくなることによるものと推察される。

IV. 意欲と意欲的行動の関連について (研究4) 目的

本研究では、高野(1988)の考えに基づき、「興味関心」、「目標」、「自信」という3つの側面を中心に意欲をとらえている。しかしながら、これらはいくまで「意欲に関する」側面であり、直接的に「意欲」を表すものではない。そこで、本研究では、上記の3つの側面とは別に、実際の行動として見られる「意欲的行動」を、「勉強」、「運動」、「友人関係」の3つの場面それぞれにおいて設定し、意欲に関する3つの側面が「意欲的行動」とどのように関連しているのかについて検討し、本研究でとらえる「意欲」と実際の「意欲的行動」との関連を明らかにすることを目的とする。

方法

【調査時期】

2012年11月～12月

【対象者】

小学校4,5,6年生の児童488名(T県と他1都道

府県内の小学校 4 校 男258名, 女228名, 不明 2 名)

【調査内容】

意欲, 及び意欲的行動に関する, すべての質問項目について「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらとも言えない」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法により回答が求められた。

なお, 測定尺度には, 研究2で作成された意欲尺度および意欲的行動尺度が用いられた。

結果

【1】意欲と意欲的行動との関係について

意欲と意欲的行動との関係を検討するために, 意欲尺度の各因子項目合計得点と意欲的行動尺度の各因子項目合計得点との相関関係が求められた。結果は, Table 7 に示す。「意欲」尺度の「自律」, 「目標」, 「有能感」と「意欲的行動」尺度のすべての因子の間において, 有意な正の相関関係がみられた(いずれにおいても $p < .001$)。ただし, 意欲第 2 因子「興味関心のなさ」と, 意欲的行動尺度のすべての因子との間にもみ, 負の相関関係が見られた。

Table 7 意欲と意欲的行動の相関関係

	知識探究	運動能力向上	交友活動
自律	.639***	.378***	.259***
興味関心のなさ	-.259***	-.203***	-.208***
目標	.379***	.339***	.317***
能力感	.381***	.308***	.371***

*** $p < .001$

【2】意欲が意欲的行動に及ぼす影響について

相関関係についての結果から, より具体的に意欲が意欲的行動に及ぼす影響について検討するために, 意欲的行動の各因子項目合計得点を基準変数とし, 意欲の各因子項目合計得点を説明変数とする重回帰分析が行われた。重回帰分析の結果は, Table 8 に示す。また, 以下にて, それぞれの基準変数ごとにその結果について詳しく述べる。

Table 8 『意欲→意欲的行動』の重回帰分析の結果

	知識探究	運動能力向上	交友活動
自律	.513***	.226***	.033
興味関心のなさ	-.087*	-.098*	-.147**
目標	.093*	.165**	.176***
能力感	.158***	.163**	.278***
重相関係数 (調整済みR ²)	.442***	.206***	.189***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

(注) 数値は標準偏回帰係数(β)を表す。

a. 意欲的行動第 1 因子「知識探究」に及ぼす意欲の影響について

意欲第 1 因子「自律」の偏回帰係数は(β) = .513($t(428) = 12.077^{***}$), 第 2 因子「興味関心のなさ」の偏回帰係数は(β) = -.087($t(428) = -2.325^*$), 第 3 因子「目標」の偏回帰係数は(β) = .093($t(428) = 2.263^*$), 第 4 因子「能力感」の偏回帰係数は(β) = .158($t(428) = 3.939^{***}$)であった。したがって, 意欲的行動第 1 因子「知識探究」に及ぼす影響は, 意欲のいずれの因子においても有意であった。なお, この時の回帰式全体の説明率は, $R^2 = .442$ ($F(4, 428) = 86.405^{***}$)であり有意だった。

b. 意欲的行動第 2 因子「運動能力向上」に及ぼす意欲の影響について

意欲第 1 因子「自律」の偏回帰係数は(β) = .226($t(430) = 4.478^{***}$), 第 2 因子「興味関心のなさ」の偏回帰係数は(β) = -.098($t(430) = -2.191^*$), 第 3 因子「目標」の偏回帰係数は(β) = .165($t(430) = 3.383^{**}$), 第 4 因子「能力感」の偏回帰係数は(β) = .163($t(430) = 3.407^{***}$)であった。したがって, 意欲的行動第 2 因子「運動能力向上」に及ぼす影響は, 意欲のいずれの因子においても有意であった。なお, この時の回帰式全体の説明率は, $R^2 = .206$ ($F(4, 430) = 29.178^{***}$)であり有意だった。

c. 意欲的行動第 3 因子「交友活動」に及ぼす意欲の影響について

意欲第 1 因子「自律」の偏回帰係数は(β) = .033($t(427) = .646$ n.s), 第 2 因子「興味関心のなさ」の偏回帰係数は(β) = -.147($t(427) = -3.256^{**}$), 第 3 因子「目標」の偏回帰係数は(β) = .176($t(427) = 3.543^{***}$), 第 4 因子「能力感」の偏回帰係数は(β) = .278($t(427) = 5.748^{***}$)であった。したがって, 意欲的行動第 2 因子「運動能力向上」に及ぼす影響は, 「自律」を除く意欲のすべての因子において有意であった。なお, この時の回帰式全体の説明率は, $R^2 = .189$ ($F(4, 427) = 26.108^{***}$)であり有意だった。

考察

以上の結果から, 仮説2を支持する結果が得られ, 本研究でとらえる「意欲」が実際の「意欲的行動」に影響を与えていることが明らかとなった。また, 「自律」, 「興味関心」, 「目標」, 「自信」という観点

が、意欲を構成する要因として適切であることが示された。まず、「知識探究」が特に「自律」から影響を受けているのは、“話し合いでは、自分の意見を持って参加するようにしている”というように自分の考えをしっかりと持ち自分から進んで行動する姿勢が、授業で積極的に発表したり、自分のわからない問題や疑問を積極的に解決しようとするにつながるためであると解釈される。

次に、「運動能力向上」が特に「目標」から影響を受けているのは、“将来なりたいものがある”や“今何かがんばりたいものがある”のように、理想とする自分のイメージや夢を持つことが、体育などで「次は〇〇の技ができるようになろう」と具体的な目標を持って行動することにつながるためであると解釈される。また、「運動能力向上」は、「能力感」や「自律」からも影響を受けている。「自分はこれができる」という能力感が「これができたから、次は〇〇をできるようになろう」というように次の目標を持つことにつながるのが推察される。さらに、目標に向かって自分を自律的にコントロールしているため、目標を達成できるように練習などを頑張るようになるのではないだろうか。「交友活動」の「能力感」に影響を受けているのは、「自分はできる」という自尊感情を持つことで、対人場面においても自信を持ちやすく、それが積極的な人間関係構築と結びつくためであると解釈される。

全体的考察

まず、子どもの認知する親の養育態度「受容」次元が意欲に及ぼす影響について、意欲を高めるためには子どもがポジティブな状態のときにほめたりすること、ネガティブな状態の時になぐさめたりはげましたりすること、いずれも重要であることが示された。このことから、子どもの状態に合わせて「受容」を行っていくことが、子どもの意欲のためには必要であることが推察される。また、「目標」は「ポジティブ時受容」からのみ、「興味関心のなさ」は「ネガティブ時受容」からのみ影響を受けていることから、子どもが目標を持ってものごとに取り組むようにするためには、子どもの成功をほめたり、または普段からコミュニケーションを通して子どもが考えていることや思っていることを聞いたりすることが必要であり、子どもが様々なことに興味関心を持てるようにするためには、子どもが悲しい時に

なぐさめたり励ましたりし、親が自分の味方でいてくれると子どもが認識することが必要であると考えられる。

しかしながら、親からの受容による子どもの意欲の差について見ると、【ネガティブ時受容群】及び【ポジティブ時受容群】と【受容高群】の間にはあまり有意な差は示されなかった。このことから、もちろん「ポジティブ時」、「ネガティブ時」の場合を問わず親から「受容」されることが重要であることは言うまでもないが、「ポジティブ時」、「ネガティブ時」どちらか一方でも子どもから「受容」が認知されれば、子どもの意欲につながりやすいのではないかと考えられる。また、分散分析の結果より、「自律」では「ネガティブ時」の「受容」が特に重要だと考えられたが、「能力感」にとっては「ポジティブ時」の「受容」が特に重要であることが推察される。

今後の課題

本研究では、意欲が意欲的行動に与える影響も示され、「養育態度→意欲→意欲的行動」という仮説における「養育態度→意欲」、「意欲→意欲的行動」の部分は概ね説明されたと言えよう。しかしながら、連続した因果関係については、今後、さらなる検討を行い、明らかにしていくことが必要とされる。また、「受容次元」の因子「ポジティブ時受容」の項目を見てみると、子どもが成功したときの「受容」と、子どもの普通の働きかけに対する「受容」の両方の内容が含まれている。これらの受容感を区別して調べることにより、「受容」と「意欲」との関連をより明確にすることができるであろう。

さらに、本研究で作成された尺度の場合、因子によっては項目数が充分でないと思われるものもあったことから、下位尺度の項目数を増やすなどを今後の課題とし、さらなる検討を行っていくことが望まれる。

引用文献

- 浅川南 2008 「友人関係が小学生の登校意欲に及ぼす影響に関する研究」 日本教育心理学会第50回総会発表論文集 35
- 橋本健夫・川越明日香・谷山麻香 2012 「児童の学習意欲の喚起と授業実践」 長崎大学教育学部紀要:教科教育学 第52巻 11-19

廣田佳代子 2004 「親子関係が小中学生の「心の健康」に及ぼす影響－親子の生活時間に注目して－」東京工業大学大学院社会理工学研究科学位論文概集 No. 35

深谷昌志 1990 「無気力化する子どもたち」NHK ブックス

船木智美・熊谷信順 2005 「小学生の無気力感と学校環境適応感との関係」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 第19号 93-102

姜信善・酒井えりか 2006 「子どもの認知する親の養育態度と学校適応との関連についての検討」富山大学人間発達科学部紀要, 第1巻 第1号 111-119

笠井孝久・村松健司・保坂亨・三浦香苗 1995 「小学生・中学生の無気力感とその関連要因」教育心理学研究 第43巻 第4号 424-435

河村茂雄 2000 「児童のスクール・モラルに影響を与える要因の分析」岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 第10号 15-22

広辞苑 1955 第1版

栗原清子 2001 「小学生の学校での意欲に関連する諸要因」日本教育心理学会総会第43回発表論文集 237

李相蘭 2001 「青年期無気力傾向に関する比較研究－日・韓の大学生を対象に－」東京大学大学院教育学研究科紀要 第40巻 139-150

文部科学省 2007 「次代を担う自立した青少年の育成に向けて」(答申)

菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・瀬地山葉矢・菅原健介・北村俊則 2002 「夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連－家族機能および両親の養育態度を媒介として－」教育心理学研究 第50巻 第2号 129-140

角谷詩織 2005 「中学生の学校生活への満足感を高める総合的な学習の時間」上越教育大学紀要 第25巻 第1号 217-225

高野清純 編 1988 「無気力 原因とその克服」教育出版

武田真梨子 2010 「親の期待と子どもの受けとめ方－子どもの将来への意欲と自己否定感に与える影響－」ベネッセ教育研究開発センター

戸ヶ崎泰子 1999 「小学生の学校不適応感に及ぼす小学生の社会的スキルと養育態度の影響」日

本教育心理学会第41回総会発表論文集 709

山本由紀子 2008 「学習意欲を高める学級経営－児童の認知的変容と動機付けについて－」教職大学院派遣研修研究報告 63

謝辞

本研究を実施するにあたり、小学校の先生方より多大なるご協力をいただきましたことに、厚く御礼申し上げます。また、調査にご協力いただきました児童の皆様から感謝申し上げます。

(2015年5月19日受付)

(2015年7月13日受理)